

神奈川からがんをなくす会(ACクラブ)

総 括

昭和51年発足の「肺と胃のがんをなくす会」以来30年、現在のACクラブ以来20年を経た。本年度の入会は10名。男女比1.3:1。双方共消化器との組合せが多く、女性特有の子宮、乳がんの単独は少ない。年齢層は60、70台が多い。胃X線検査後の内視鏡受診者は少ない。超音波検査ではとくに著明な病変としては胃、肝のう胞および胆嚢ポリープが多い。肺がん検診としての胸部X線検査では精検として6例のCT検査が実施されている。単純X線検査と単純X線加CT検査での所見は表8の通りで本年度はがんと診断する所見はなかった。「その他」は大動脈石灰化など肺以外の所見である。「微細所見」はCT検査による特有の所見でその殆どは先ず経過観察が一般的な診断手順である。乳がん検診では乳房X線撮影で再診すなわち経過観察が多い(表9)。子宮がんも殆ど著明な所見はない。付加検診としての生化学、末血、心電図などの検査では40~50%に有所見者を認め特定の疾患を求め、メタボリックシンドロームなどを視野に入れて管理指導が必要である。

消化器がん検診

平成17年度に消化器がん検診を受診したのは292名(男157名、女135名)であった。このうち胃がん検診としてX線検査または内視鏡検査を受診したのは201名(男112名、女89名)で149名(73%)は異常なしで、胃がんの発見はなかった。

腹部超音波検査を受けたのは259名(男141名、女118名)で、肝臓・胆のう・膵臓・肝臓のがんはみられなかった。

大腸がん検診の免疫学的便潜血検査をうけたのは260名(男137名、女123名)で、二次精密検査をうけた11名から大腸ポリープ3例が発見されたが、大腸がんはみられなかった。

肺がん検診

総数346名のうち肺がん検診受診者は226名が65%にあたる。当然、他の消化器などと併用が175名とその77%を示しているため、肺がん単独検診は41名23%である。女性は4例と少ない(表1)。年齢構成は50歳以上が83%を占めがん検診としては理想的である(表2)。

方法としては単純X線正面撮影年2回と年1回のヘリカルCT検査および喀痰細胞診である。読影は比較読影を厳守しているためダブルチェックは行わない(表6)。精検は単純X線撮影による確認または

ヘリカルCT撮影とする。表8は有所見件数507の内訳であるが胸部X線フィルムの可及的多くの所見をチェックするため心大血管、骨などの所見が298件と約60%を占める(その他の項)。従って縦隔、肺に限ると胸膜肥厚、癒着および治療所見は60%を占める。本年度は肺がん例はない。表7のように喀痰細胞診から異常例は認めていない。

乳がん検診

乳がん検診は17年度7月より担当者が代わったため検診方法も少しづつ変化しつつあるも、従来の方式も一部踏襲されて居り、過渡期といえる。従来は毎年MMG3方向撮影を主体としたもので、婦人検診部の方式とは異なっていた。これは発足当時は先進的であったと思われるが、一般検診の方式が厚生労働省及び乳がん検診学会中央精度管理委員会のMMG検診ガイドラインに沿ったものとなり、さらに当診療所方式を加味し、USを積極的に導入したものに移行しつつある。細胞診も従来は神奈川県立がんセンターへ依頼していたが当所で行っている。

初回受診者6名再診112名で発見乳がんは無い。乳がんは初診者から多く発見されるので、このような限られたグループよりの発見は少ないので、能率面からでは一般検診でも良いのではないかと。

子宮がん検診

平成17年度ACクラブ会員数346名のうち女性会員数は152名(前年度165名、13名減)で、年齢階級別構成では30歳代以下2名(1.3%)、40歳、50歳代48名(31.6%)、60歳代以上102名(67.1%)であった。

平成17年度の子宮頸がん検診受診者は106名、引き続き体がん検診を受診したもの94名であって、女性会員152名中頸がん検診受診率は69.7%、体がん検診受診率は61.8%であった。受診者のうち頸部細胞診、内診の結果、要精検と判定されたもの2名、要再検とされたもの2名であった。要精検者2名の内訳は、組織診査の結果軽度異形成と診断され現在追跡検査中のもの1名、卵巣クリニックで精査の結果両側卵巣のう腫と診断され、希望により横浜市大産婦人科に紹介したもの1名であった。要再検の2名は再検査の結果異常がないことを確認した。

体がん検診受診者には要精検者、要再検者はなかった。

関係の集計表は96頁に掲載